

---

# 君と彼女と私。

真辺 鈴華

---

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

## 注意事項

JのPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

### 【小説タイトル】

君と彼女と私。

### 【Zコード】

Z23010

### 【作者名】

真辺 鈴華

### 【あらすじ】

皆様、初めまして！真辺 鈴華といいますっ！  
えと、あらすじです

主人公、小野明梨は幼馴染、木下 静音と阿久津 祐樹たちと幼いころと変わらない関係を続けてきましたが、ある出来事が3人の関係を変えています…

「人気者委員長とモテる君、そして「私」。3人で一つ。そんな今までの関係がずっと続くと思つてた…」

初心者ですが、頑張りますのよろしくおねがいします^ ^、

## 第一話 #日常#

この日は、残暑にしては冷たい風が吹いていました…

「行つてきます」

私は小野 明梨。中学2年生。

「明梨、お早うつ！」

この子は…幼馴染の木下 静音。

「あ、静音。お早う」

「ね、明梨。昨日出た数学の宿題出来た？」

「当たり前でしょ、数学は私の得意分野だし。それに、苦手分野だろうとしつかりこなしてるわ。静音も知ってるでしょ？」

「ん…まあね。さつすが明梨。すごいね」

そういうと、静音はスクールバッグから何かを取り出す。

…数学のノートを。

「ね、じゃあ、此処の問題、分かつた？」

静音が指差す先にある問題。方程式。

「… $X = 10$ 。これは結構簡単なやつじゃない？」

「む…あたしが方程式系苦手なの、知ってるでしょ？」

そうだった。静音は人間関係の方程式は得意だから忘れてた。

「そういえばそうだったわね。ごめんなさい」

一応謝つておく。

「あ！一人ともおはよう！」

後ろから静音に抱き着く影。

「阿久津君！」

「祐樹！」

静音に抱き着いてきた影の名は、阿久津 祐樹君。静音と私の幼馴染。

「もう…明梨。いい加減その「阿久津君」でのを止めてほしいな…

何年連れ添つてるのさ。静音みたく「祐樹」って呼んでほしいな」

」

「しょ……しょうがないじゃない！癖になっちゃってるんだもの……」

それに、恥かしいし……

「まあ明梨はツンデレだからってゆうか、祐樹！早くあたしから離れてくれないかな？」

にっこり笑つたままで静音が阿久津君の腹部に肘を深々と打ち込む。

「ぐふ…ヒドイ…なんか気持ち悪くなつてきた…」

「そんな訳ないでしょ。ちや～んと手加減したよ？」

静音の笑顔が怖い。

「さすが静音ね。ちゃんと授業を受けられるように…」

そんな会話を交わしている間に教室に入る。

「つて、静音？静音は隣の教室だよね？」

「あ。やつちやつた～…去年まで一人と同じだつたからさ～

「危なかつたわね。もう少しで違反だつたわよ？」

「ギリギリか～」

「そ～ね～…じゃ、ここで。」

静音は阿久津君にはキツイ視線を、私に微笑みを残して去つて行つた。

「んじや。厄介なことになる前に…」

そういう阿久津君の首根っこを誰かが掴む。

「あ～く～つ～！おまえな～」

あ。この人は知つてる。谷口 幸樹君。

「た、谷口…お前が何を聞きたいのかは、痛いほどに伝わつてくるんだが、とりあえず、場所を変えないか？」

少し苦しそうに顔を歪めた阿久津君が言つ。

…厄介なことつて、谷口君のことかしら。

…本当なら今すぐ事情収めといきたいが…仕方ない

そういうと、谷口君は阿久津君を引きずるように…といつか、引きずつて何処かへ連れて行つた。

…なんのかしら

とりあえず自分の席に着き、荷物を下ろす。

「ねえ！小野さん！」

顔を上げると、何人かの女子が私の机の前にいた。

「…なんですか？」

早く用を済ませてほしい。

「あの…む…えと…」<sup>ヒ</sup>じやちょっと話難い<sup>ハル</sup>…カナ?」

「じゃあ、次の休み時間にして頂けないかしら」

私がそういうなり、本鈴が鳴る。

助かった…あの子たちとは、互いに苦手と感じているもの。  
無理に付き合いたくない。

## 第一話 #日常#（後書き）

ほとんどのかたが初めましてですね！

真辺鈴華といいます

これからよろしくお願ひします！

なんか中途半端な感じですね…

まだ、3人の関係は動いていませんが、次話くらいでチラつくと思

います。

主人公はちょっと性格きつめになっちゃいましたが…

ツンデレにちゃんとできるといいなあ…

あ、ちなみに完全フィクションですよ。

## 第2話 #クラスメイトの質問 #

「谷口…こりゃあ、時間厳守になつちまうんじや…」

チャイムが鳴り出し、谷口から逃げる術を見出した俺。

「糞…もう少しで全部吐かせられるところだったのに…！」

サラサラそんな気は無かつたんだが？

「まあいい、野村女史に目え付けられるのもやだしな」

「そういい、谷口が教室へ向かった。

俺もその後を慌てて追う。

ちなみに、時間厳守とは、俺が通う学校の規則の一つで、朝や授業の初めの本鈴に間に合わなかつた時の事…まあ、うちの担任はそれに厳しいわけだ。

「つと…危なかつた…」

チャイムが鳴り止むギリギリで着席。

「阿久津君。谷口君。残念な事にギリギリで時間厳守です」

おお…野村女史の視線が痛い…

「とはいえ、ギリギリですからね…今回は…」

「おお！？」許して…

「…いつもよりき・び・し・く・取り締まります」

…くれるとと思ったのに。野村センセの鬼。

「鬼とは失礼ですね、阿久津君。今回のような場合、今後この様な事が無いように取り締まるのは当たり前のことです」

さ、さすが野村女史…俺の心を読みやがつたか！？

…そして何故だ、谷本がとても嬉しそうなのは…

「それでは、学活を始めます。では、今週の…」

＊＊＊

+++

＊＊＊

「小野さん…」

「ええ、分かつてゐるわ」

とうとうこの時が…

…出来れば避けたかったわ。

と、何時か静音が言つていたガールズトークの聖地、女子トイレに連れて行かる。

「えつとね…阿久津君の事を聞きたいんだ」

「それなら静音でもいいんじゃない？貴方達も静音の方が話しやすいでしようし」

「聞きたいことが、静音相手だと、逆に聞きづらいの」

リーダー格の女子が顔を歪ませる。

「聞きたい事つてのが、その…静音と阿久津君が付き合つてゐて  
噂うわさ、ホントなの？」

## 第2話 #クラスメイトの質問 #（後書き）

おはこんばんわ～  
まなべ  
真辺です。

今回は、この話を書くにあたって。  
真辺は、恋愛経験ゼロです。ほぼ妄想で書いてます。（マンガを参考書に。）

中2といつ年は、中1の真辺にとって、空想（妄想）の世界です。  
何も気にしない腐子です。

とまあ…人生経験でこの話は書けないんですね…  
登場人物の気持ちで、どこかオカシイとかがあつたら、びしっとかつてやって下さい。  
でわ、また第3話でお会いしましょうー。

いつも通り……？

その言葉を聞いて、冷水を浴びせられた様な感覚に捕らわれた。いつも通りの朝だつた。

3人いつも通りの会話で…

「え、もしかして知らないの！？」

女子の一人が声を上げる。

「じゃあ、阿久津君に直接聞いた方が良いのかな…？」

「いやいや、まずは谷口だよ」

「それじゃ、小野さん。ありがと」

後には私だけが残される。

力が抜けて、壁に寄り掛かる。

「つ…」

廊下に響き渡るチャイムが、私を正気にさせた。

「いけない…授業に遅れちゃう…」

教室へ、急ぐ。

+++ \* \* \* + + +

「小野はんが、珍しいですな」

社会の先生が、サラサラと髪を揺らしていく。

中本 景子先生。生糸の京都人。

上京するも、京都弁と直す気はサラサラ無いという。

着物を綺麗に着こなし、腰まで伸びた艶のある黒髪の一部を後ろで束ねている、

何処か日本人形のような先生だ。

「すみません…」

明梨が頭を下げる。

「まあ、小野さんは普段良い子や。そない氣になさんな？」

ほほほ、と中本女史が笑い、明梨も寂しげに笑う。

「ほんとに珍しいな… 明梨が時厳取るなんて」

そう呟いて、斜め前の明梨の姿に目をやる。

「そな、みなはん。教科書十一ページを」

明梨の様子がおかしいのが気になつて、その日の授業は身が入らなかつた。

+++ \* \* \* + + +

「阿久津。なんか今日の委員長、様子おかしかつたな」

「お前もそう思つたか、谷口」

「ああ。今まで一度も時厳をとつた事の無い委員長が、チャイムが鳴り終わつても教室にいないなんてな、おかしすぎるぞ」

腕を組んでそう、谷口はいった。

## #4 そう呼んで

「何かあつたんだろ？」「うな」  
そう言い、俺を見る、谷口。

「何故俺を見る」

「いや…阿久津が何か変な事したのかなって…」

「…例えば？」

「…」

なんか嫌な予感。

「い、言わなくて良い。なんか『学校で言つても大丈夫かな…？』みたいな顔になつてるし…！」

「さすが。俺の心の友だ！テレパシーだな？なつ…！」

「テレパシー…つて…」

「お前、たまに面白いこと言つな…」

\* \* \*

+ + +

\* \* \*

「静音ちゃん…！」

声のする方に目をやる。

と、金髪蒼眼の女子が此方に向かつてくる。

「湯口先輩、何ですか？」

立ち止まって、返事を返す。

「あのね、静音ちゃんは、今年、生徒会立候補してくれるかなって

…

「生徒会…？」

「うん。ワタシは、静音ちゃんに後釜やつてほしいんだ」

湯口 早百合先輩。

現生徒会長。クウォーター。

綺麗<sup>キレイ</sup>に整つた身体、顔立ちは、西洋人形のような女性<sup>ヒト</sup>だ。

「あたしが…ですか？」

「うん。ワタシの知つてゐる後輩の中で、一番適任な口は、静音ちゃんだからお願ひできないかな？」

フワフワとした金髪が揺れて、湯口先輩が頭を下げる。

「…か、考えてみます…」

視線が、あたしに集まつてきているのがわかる。

湯口先輩は、人気者だからなあ、と思つ。

会話が聞こえていなかつた人から見れば、あたしが先輩に何かしたことでも思つて知るのかもしれない。

「そ、それでは…後日に…」

あたしが生徒会長。

それは重すぎるんじゃないかな、と思つ。

あたしよりも、適任なのは…

\* \* \* + + + \* \* \*

「明梨、如何したんだ？」

「あ、阿久津君…何よ、いきなり…」

いきなり、声を掛けられた。

頭を搔いて、阿久津君が言う。

「その阿久津君つての止めてくれないかな…祐樹で良いくつて…」

「…」

「な、何だよその顔は…つか、静音は良くて俺はダメなんだ?」

「なんとなく」

「や。じゃあ、今日からちゅんと祐樹つて呼べよ」

## 第5話 #5 や、嫌だ…

「それは…」

『祐樹』つて…私には呼べない。

そんな力、私には無い。

「…昔はよく、『祐樹君』つて、呼んでくれてたのにな…」

少し、寂しそうな顔。

その顔に、私の胸が、呼吸が止まりそつた程に締め付けられる。早く、阿久津君から、離れなきや…

そう、思う。

一緒にいると、何故か、息が苦しくて、胸が痛くて、死んでしまう。そうだ。

「…………」

阿久津君の手が、私の頬に触れる。

「如何しても、ダメか？」

悲しそうで、でも優しい声に、身体が融けるんじゃないかと思つた。

「や、嫌だ…」

阿久津君の手から逃れようと、後ろに引く。

「ひやつ！」

足元の鞆に躊躇ぐ。

「危な…」

そのまま、後ろに倒れる。

「え…」

目の前に、阿久津君の顔があつた。

「あ…」

阿久津君が耳まで赤くなる。

「え…と…」

上から覆い被さる様な体制のまま、阿久津君が言う。

「とりあえず、すみません。」

「…なんで謝るの？」

「いや、何か…」

少し神妙な表情<sup>かお</sup>で、続ける。

「傷ついた…みたいな顔、してるからさ…」

…そう思つてるなら…

「まず、離れてくれないかな…？」

「うわ、悪い！」

阿久津君が私から離れる。

## PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連＝横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能してください。

---

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。  
<http://ncode.syosetu.com/n2301o/>

---

君と彼女と私。

2010年11月19日21時55分発行